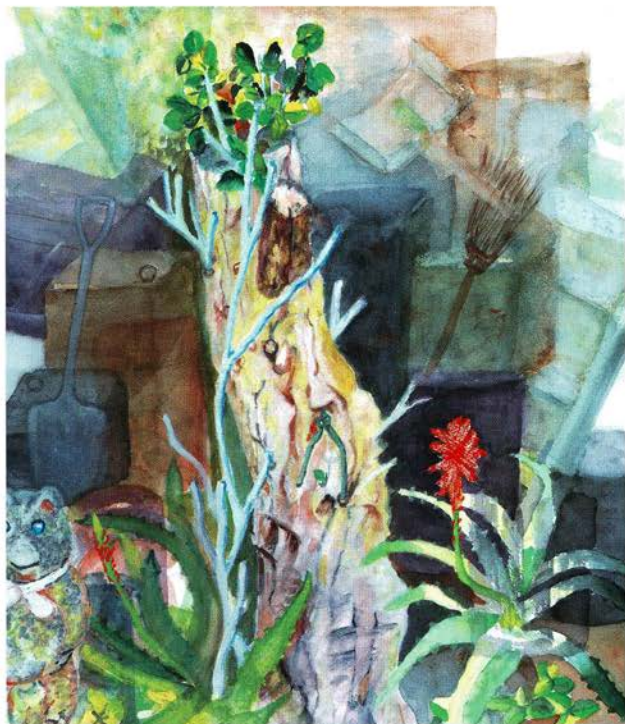


村野次郎創刊

香蘭



2021年(令和3年)10月号

第98卷

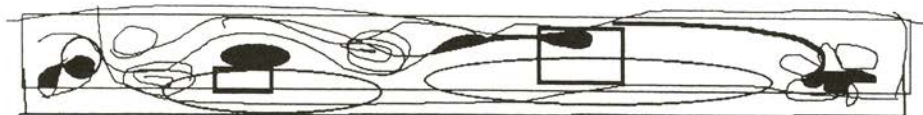
第10号

通卷1090号

二〇二一年(令和三年)十月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十八卷第十号



香 蘭

2021年(令和3年)10月号
第98巻 第10号 通巻1090号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(74)	松沢	みどり	表二
近詠十五首 「錆色の空」	坪	裕	2
作 品	一		4
	二		24
	三		31
推薦香蘭集			37
香 蘭 集			38
一頁公論(5) 『能登往還』を読み返す		丸山	17
作品一特選(八月号)	朝香・石井・伊藤(美)・大井田・柏原(義)・川原・城・高島・坪・長野・満木		18
作品二、三特選(八月号)	阿部(容)・加瀬・中井・古野・脇谷・三浦(倫)・小原・丑山・河野・田村(久)・小笹・三上		20
村野次郎への旅(138)		千々和	22
エッセイ・自由研究 万葉集「宮廷歌人の恋と歌」	その三 山上憶良	近藤	44
焦 点(八月号) 「映像になる歌」	鈴木(桂)・室橋・原(礼)・古澤	伊藤	50
七 首 抄(八月号)		長野	51
中村かよ子「火星」評(八月号近詠十五首)		千々和	52
作 品 評(八月号)	作品一	大井田	54
	作品二	青山	56
	作品三	柳山	58
	香蘭集	田中	60
文法あれこれ(29)		千々和	62
明宝研究会 第一二一回七月例会		久幸	66
緑 地 帯	相川	岐美子	76
歌会及び会合・会員消息・他	公子・小笹		78
編集後記・新宿日記			82
表紙絵	中村 陽子「おしゃべりな木」	目次・緑地帯カット	和雄

村野次郎作品 私の愛誦歌（74）

眼科医に待つ間来る人も来る人もあきる

ばかりみな眼をば病む

『村野次郎歌集』

眼科を受診する人は皆、目に何らかの疾患を抱えている。そんな当たり前の事実には驚いていないところが面白い。「来る人も」のリフレインや「あきるばかり」というオーバーな表現に率直な心情が読み取れる。当たり前のことを詠む楽しさを実感できる歌である。

この歌は昭和四十二年、「検眼」という連作の一首である。中にはこんな歌もある。

年長く使ひ来しわが眼よと感新にす検眼の後

自分の目に対して「なんと長く使い続けてきたのだらう」と、これも素直な感動をそのまま歌にしている。まるで子どものような、真つ直ぐな感情の持ち主だったのではないだろうか。もう叶うことはないが直接お会いしてみたいかと、こんな歌に出会うたびに、しみじみ思うのである。

『村野次郎歌集』（短歌研究文庫）52頁。『村野次郎三百首』には収録されていない

四 選 者 の 作 品

誰にも言わず 平塚 千々和 久 幸

お別れは突然に来る いくそたびこのフレーズを嘔みたるものか
瑣事、雑事にひと日泥濘み週末をながなしたただ慌ただしけれ
進る若さがある夜戻れるを誰にも言わず 夢覚めてのち
予期せざる段差にしばしば躓けど転倒したること未だなし
ダッシュして黄信号を駆け抜ける脚力われに残りているも
夏の旅に持ち行く本を選びいる夜更けを遠くコオロギの鳴く
ワクチンの幻想破れこの国は総崩れなり 五輪の終る
看護師に祭りのお面被せられ妻のはにかむ写メール届く
掛り息子 横 浜 渡 辺 礼比子
七月尽新規感染一万超公共放送五輪白熱
ウイルスも面会禁止も認知せぬ母はホームに吾を待つらんぞ
字引にて「係り結び」の前に載る「掛り息子」の無芸大食
朝ヨガの窓辺に届く鶯声あうせいの今日はミンミンに圧倒されて
歩きたい誘惑が勝つ「蛇に注意」「蜂に注意」の文字を横目に
動くとも見えぬ小舟のいつか消え机に頬杖ついてるわたし

長文のしつぽあたりは読まれぬがフツとぞ そつかラインはもういい
父母に窘められし大声が役立ちておりマスクの時代

桜 桃 鎌倉 香山 静子

羊雲を突き抜けて飛ぶ鳥一羽もう地上には戻らぬ如く
当て所なくゆふ歩みゆく先は熱帯雨林があるひは凍土
故郷より送られ来たる桜桃の紅さ目に滲む心に沁みる
蟬の声聞くことあらぬ北国の静けき夏恋ふ故郷の夏を
続きたる暑さとうんざりしてゐるしがこの朝ふはんと美蓉のひらく
コロナ禍を守るがに坐す狒犬よ今日の西日の暑くはないか
「お母さん、マスクを取つちやいけなの？」突然きこえる子供の声が
ジェンダーを力説する御婦人 さうです貴方は確かに女性
ごきげんよう 我孫子 丸山 三枝子
唄っていたがそれではごきげんようと飛び発ちゆけり赤翡翠は
すんすんとゆくあめんぼう 今われはどんな人にもなりたくはなし
ゆたかなる機知の歌はも 歌会に読み熟せずにはいはいたりき
川三つ越えて来たれる歌会に難癖つけてわれはいたりき
半夏生の裏白の葉のひるがえり去りてゆきたる人の名を消す
ゆりもどし木々をいたぶりいし風の止みていつしか月たかく澄む
帰るべき所ならねどいつよりかあしたゆうべに月を仰げる
六十年かけて咲きたる竜舌蘭いのちなりけりいのちなりけり

作品一特選



(八月号作品から)

桜井京子 選

桑の実 東京 朝香 ふさ枝

草むらで赤く熟れたる蛇苳逃げた大蛇は行き方知れず

草むらにどくだみつゆ草あかまんま咲きて桑の実甘くなりたり

白枇杷の熟るころなる伊豆の里親しき友が密と逝きたり

不如帰の声の聞こえる杜に来て昔語りをさくごとくいる

川ぞいの道に枝張る枇杷の木の届かぬ高さに実は熟れいたり

〈黄金虫は金持だ〉と雨情が詠みし黄金虫はゴキブリだった

・上句、下句の展開の妙味。五首目は遙かなものへの渴望とも読める。

ジエラス・ガイ 習志野 石井雅子

眼鏡かけ眼鏡をさがしマスクしてゐること忘れマスクを探す

枯草の匂の中にシヨール巻き田舎の駅であなを待つわ

「骨盤をしつかり立てて座りなさい」人生訓ではないけどヨガは

漁師町の路地抜け出れば堤防の先に満ちある銀ねずの海

逃げ出した警察犬の捜索に警官四十人ひと日暮れたり

・日常の些事を詠うかと思えば時空を旅する夢幻自在な作者。

ひとりの散歩

川崎 伊藤 美恵子

茶葉多く入れて煮出したアッサムにインドのはるけき旅を思うも

わたしでない誰かが置いていったよう 庭の木椅子の麦わら帽子

送電線の囲いの中に生うる草役目あるがにすんすん伸びる

いたわりて無理をせぬよう言いやればその分夫は老けてしまいいぬ

乗客のスマホにポロネーズ鳴り出でて山手線にシヨパン降臨

・二首目と五首目、日常の些事を詩に高める手法を心得た作者である。

春(その二)

川崎 大井田 啓子

こもり居を出でて歩めり 潦にはたつみに映る青空眺めたりして

木の名前クログネモチと知りてよりそこそこにあるその朱き実が

もうすこし先まで行かうキックスケーターはく子に並び信号を待つ

鶯の声する方へ曲がりたり人影のなき三叉路に来て

電話すると言ひ帰りたる子は夜にメール寄こして終りとなりぬ

帰りくれば上がり框が大根が放り出されて動けずもあり

・三首目、キックスケーターの子が爽やかな風を運んで来た。

老 鶯

尾道 柏原 義清

こつち来て並んで座ろう縁側に八十媪はくつたくなし

かの世までどちらが先に馳せつくか我は兎となりたるらしも

初心者が使うは危険なチエンソー最年長のわが使うなり

二月には笹鳴きなりし鶯が梅雨には老鶯などと呼ぶるる

選挙違反なくば使わずすみたるを補欠選挙の十二億円

・老いや死に思いを致し、五首目では政治家の節操のなさを怒る。

母の声 川越 川原 優子

亡き母の声に似てると電話にて久しく会わぬ人に言われる
わが声は母に似るらしわが耳に響くわが声母とは違う

消費期限五時間過ぎしおにぎりがわが体内を無事通過せり
久々にカレー作りてひとり食むカレーは家族と一緒が似合う
ひと鍋のカレーが足りない日もありしひとり居なればレトルトで足る
・四首目と五首目、カレーが家族の絆であることを思い起こして。

豈図らんや 豊中 城 富貴美

東北の復興挙げしが東京五輪いつしかコロナに勝つためと言ふ
コロナ禍を世界中から「こんにちは」東京五輪に来るのでせうか
常にマスク外せぬ社会にならうとは豈図らんや接種待てり
しとしとと青葉を濡らす雨のなか傘の四人は密ではないか
背後から「ヤバイヤバイ」とやつて来る振り向けば歩きスマホの男
鼻に枝もて頭搔くごきげんな象のニュースにけふは笑へた
・五首目、何が「ヤバイ」か明示しないところで歌に影らみが出た。

父さんの耳 鎌倉 高 島 憲 子

ケータイにやつと出でたる父曰く「ごめんよ大江戸捜査網見てた」
電話嫌ひの父がこの頃かけてくる 話し相手がみな他界して
「へんだなあ、おまへの声が遠いなあ」「父さんの耳の方が遠いよ」
久びさの歌会開催にマスク越しの話はづめり五十肩同士
幼子を預けてひと日走りたる娘のまづ食む大盛りサラダ
・一―三首目の父との会話、今は電話で近況を確認するしかない。

楽しそう 東京 坪 裕

六十まで遅々と人生いき来しがそれ以後急に早くなりたり
間隔を開けて並べと言うけれどこんなことしか出来ない日本
緑の雨青葉にそそぎ楽しそう胸の深くにバラが咲いたよ

息を吸い吐いたりしながら生きている緊急事態は延長されて
この辺で少し休んで行きましょうこれからずうつと歩いてゆくから
・世の中の喧騒とは距離を置き、マイペースの人生を楽しんでいる。

自販機の水 横浜 長 野 道 子

風吹けば八分音符に風止めば八分休符のすずらんの花
不調なる夫が気晴らしの散歩より小豆アイスをわれに買いくる
救急の外來処置に落ちつきて夫は自販機の水を飲みおり
「もう、だめだ」夫が呟く雨の朝二時間たてば予報では晴れ
お一人様五つまでなるカップ麺二つ買いきて今日は良しとす
・四首目、降ったり晴れたり、こんなところに人生の綾が見える。

脳トレ 川越 満 木 好 美

釧路では今ごろ桜咲くと言う川越はもう紫陽花咲くに
来年もまた来るだろうと思いつつ見ていた花火 あれから会えず
咲きそろうアマリスの上に雨が降る遠慮などなく雨が降りつく
鉢に咲くピンクの薔薇をわが方へ向かせておりぬぐるりと回し
曇ったり晴れたりしている空見上げ今宵の皆既月食を待つ
脳トレは誰にも負けぬ母なれど財布の在りか忘れてしまう
・かすかな心揺らぎが読者の視野まで届いている。

作品二、三特選



(八月号作品から)

香山 静子 選

夏は来ぬ

宇治 中井房江

折々に安否確認など言いてガラス戸越しに手を振り合える
拳骨を合わせて国のトップ等が挨拶という 怖ろしきかな
土曜(日経)、日曜(朝日)新聞を夫買いにゆく俳壇あれば
さくら色に惹かれ植えたるマーガレット華やかすぎて疲れてしまう
信綱の記念館にて貰いたる卯木はな咲きまた夏は来ぬ

・素材を捨う時点に於ける視野の広さが好ましい。

街路樹

福岡 古野 美智子

「野良猫に餌やることは犯罪」とそれより野良の姿消えたり
樗通り天に向かひて新芽萌ゆマスクの人等も活き活き歩く
旅友は今頃黄泉へ一人旅主なき庭に白木蓮咲く

いつのまに天神町の街路樹の新緑の中ミモザの朱色
故障して入院したる冷蔵庫重症なりしか退院できず

・時間の推移に対する細やかな心遣いがある。

皆で分かつ

我孫子 脇谷 房子

介護予防運動の人数も予約時間も制約のあり
十二基のマシンを廻る体操の一回ごとに消毒をする

二分間レンジで温めるゆたんぽを夫いせいそと楽しみに待つ
オナガガモ芝生の上に散らばりて右往左往の人の間をゆく
この朝猫とひよこのじゃれ合う動画ラインで来たり皆で分かつ

・対象への迫り方に心配りと優しさがある。

〈作品三〉

やさしき口調

藤沢 阿部 容子

わが空を無くして前に建つ家の外壁は黒 若きの住むか
この朝の学生密なる江ノ電に女子高生のおしゃべり止まず
散歩する犬のふり向きリード持つ小柄な老いの顔チラと見る
訛ということではないが山形の市役所の女性のやさしき口調
老夫婦の終の住処か平家建てのガラス戸に花の絵の彫られる

・対象を細やかに観察していて、景が浮かび上がる。

遠野

東京 加瀬 喜美江

鉛温泉に迎えし朝は銀世界青空広し春に溶けゆく
露の臺が雪の糞笠被り居てふたつ並びぬ宿の庭隅
遠野に昔語りをよく聞く訛りは難し心は優し
語り部の終りはいつもどんど晴れ遠野の民話の赤い河童よ
何もせずぼうつとして今なれど息をしている鳥が鳴いてる

・久々の宿のひとつときを民話に酔い痴れる作者が見える。

老人施設 札幌 三浦 伶子

開花には至らぬ今日のサクラなり標本木はまだ蕾つけ
週一に会う人たちも少しずつ老い進むらし口数も減る
先週に会いたる人を今日は見ず老人施設の現実を知る
たんぽぽも桜も今日は咲くでしょう天気予報士にこやかに言う
・老人施設の現実をつぶさに詠んでいる。

春の坂 鎌倉 小原 裕光

山門の傍に置かれし方代碑の豆腐の歌を屈まりて読む
春の坂駆け下りて来るポメラニアンに引かれ飼い主喘ぎつつ来る
ひっそりと近所の人らに見送られ車出でゆくコロナ禍の葬
鳥の声鳥の姿を求めゆく人と出会わぬ道選びつつ
・物を見る目が温かく、描写も的確である。

〈作品三〉

一役を買う さいたま 丑山 眞弓

朝五時にマスク外して歩き出しきれいな空気を体に入れる
雨あがりの窓に残りし水滴に朝の太陽きらりと光る
政治家の政治家の為の政策と聞こえて来るよ初老の耳に
あやまちで頭下げるは行政の想定内の仕事と知りぬ
・現実の中に見出した素材を作品化している。

鬼百合 鎌倉 河野 慎二

鬼百合の二三も肩に不景気な次男が墓所へ来たぜ父さん
笑はれて強くなるのさ虫も樹も弔はれざる定めを生ける

軒先の雀よパン屑放りある人間なんて平気になあれ

ナルキッソスと笑はば笑ふさ池の上の顔の底なる泥亀を見つ
・敢えて弱者の場に立つて詠む作者。

歡喜の色 東京 田村 久美

青空を背にして今し咲きほこるしだれ桜は歡喜の色に
天地左右さくらに囲まれわれ謳ふ大和の国に生れし歡び
満月の光浴みつつ沈黙す工場地帯もベイブリッジも
隣をゆく回送バスはほうと光り無言に揺れるる白き吊革
・祖国をこよなく愛する気持が滲み出ている。

大船撮影所跡 鎌倉 小笹 岐美子

北鎌倉の向かいのホームに佇みし笠智衆さん飄々として
死してなお咆哮するがに荒々し大島渚の自然石の墓
大船の撮影所跡に咲く花を小津によく似た老いは見上げる
撮影所跡は女子大となりたるにバス停の名は松竹前なり
・かつての撮影所をしみじみと懐かしむ作者。

木洩れ陽 愛知 三神 進

木洩れ陽がゆれる斑の石畳先行く犬の耳がと立つ
豪快に立ち漕ぎ見せて登り坂気張る部活の自転車列
ぼつねんと墓碑に取りつく蝸牛しと雨の季告げられて
・対象への観察が行き届いていて、その場の光景が見える。

錆色の空

ゆう
裕

坪

東京に出ようと決めたその日から青く輝く海が生れた

ぬばたまの夜汽車にひとり乗り行けばミライミライと響き走れる

風呂敷を広げたように新緑の上野が急に目覚めだしたり

ふる里を勇み出でたる少年の脳なすきに写りし錆色の空

東京の空は砂鉄の匂いして錆色の街の鈍く広がる

印刷の仕事にかかわり一生を働くなんて思ってたなかった

金のたまごとおだてられつつ深夜まで低賃金で働かされた

復興を支えているのはわれ等だと誰も言わずにじっと働く

黙々と昼夜働く3Kの（キタナイ、キツイ、キケン）に堪えつつ

活版からオフセット印刷に少しずつ印刷業界変わり出したり

ふる里の岸まで泳ぎ着けないか考えている八月の海

ひと言随想

巢立ち

ニセ札が横行すれば最っ先に印刷工が調べられたり

仕事など二の次にして見ておりきあさま山荘事件勃発

軽々しく人の命をもて遊ぶ連合赤軍われは憎めり

老人とわれはなりいて錆色に今日も広がる東京の空

故郷を離れる。それは殻を破ってこの世に生を受け、巢立った後は未知の世界を一人で歩き出す小鳥のようなものである。少し寂しくまた充分に期待も持たせてくれる。

ほくは十八歳で小鳥になった。

夜行列車に揺られ上野に着いたのは、夜の明けきらぬ早朝だった。これから始まる人生に身の引き締まる思いがしていた。

上野の森から見下したビル街の町は、何か

鈍く霞んでいた。そして茶色く見えた、初めて見る東京の空だった。鉄の匂いの漂う錆色の空、青くない空、それが東京の空だと知ったときは軽いショックを受けた。

これからは、この空の下で暮らして行くかと思うと少し不安になった。

いがらつぽくて少し寂しい錆色の空と仲良くし勇気と期待を持って、人生を生きねばならないと思った。

「香蘭」創刊号を読む (五)

前号 (21年9月) の石野正太郎に続き、その後ろに掲載されている池上秋石の「そのをりふし」六首を引いておく。

そのをりふし

池上 秋石

- ・くるしやと問ふに吾妹のうべなはずまなこ
- つむりては、えみにけり (妻の産)
- ・初聲の高かりければ走りより見ればわが子は男なりけり

未だ見えぬ吾子が眼に近よせて首ふり人形の首ふりてやる (吾子)

ガラガラを鳴らせばまこと見ゆるげに眼をみはる見えぬ眼を

・帰り来れば吾子を抱きて夕刊を読むくせとなりつ年明けにけり

・人みなは兎も角もあれみづからの命はくくみ生くべかりけり (ある日に)

先の石野正太郎作品では読み下すことに難渋したが、打って変わって池上作品はまこと

千々と久幸

「男の純情」そのままに、素直に率直に詠まれている。同時代の作品にこれほどの落差のあることに正直驚いたのだった。

褒められた言い方ではないが、池上の一連は石野作品の口直しという趣の作品だった。

①の無事に男児を授かった母親としての安堵感と嬉しさ、②③④の手放しの父親ぶりはこのままそつとしておこう。

次いでいま一人、後に選者となった冬野木枯 (清張) の作品も見っておこう。創刊号では中河與一、深野庫之介、石野正太郎、池上秋石の後ろの欄の「七人集」に十一首が掲載されている。初めから五首を引く。

冬雑詠

冬野 木枯

・冬深き夜ふけの空に黒き雲のび擴りつ霧降りるをり

・泥濘の凍りそめたる道の上にはの白く夜の霰降りたり

・薄れゆく夕陽をあびて冬の雲流れゆく見ゆ

風の空に

・夕空のそぐへに立てる八ッ岳の雪峰赤し沈みゆく陽に

・入つ陽の流るる土手の冬枯の草はらはらと風に鳴りるをり

さながら信州の冬景色という趣だが、まだデッサンの域を出ない。眼前の光景を写し取ること懸念で、全体像を立体的に把握するには至っていない。

冬野はわたしが「香蘭」に入会した頃は長野に在って、自らは「ほんこつ齒科医」などと称しながら、なかなか人気のある選者だった。創刊号から「香蘭」一筋に村野先生を支え、天寿を全うされた。

ところで創刊号には、村野次郎名で「前月歌壇抄」が転載されているので左に引く。

光

・日にあたる玄関前に山茶花の白き花びらこほれてありけり

・日ならば雪を降らす寒風に咲くべくならぬ白梅の花

・眼にたちて土のからびし庭の上にしほみ落ちたる小さき茶の花

國民文学

金子 薫園
吉植 庄亮
松村 英一

・真向ひの山の杉生に明りある日のいろみれば夕べに近し 半田 良平

朝の光

・海のうちへ躍りいでたる一つ岩寄する波囀みしぶきと散らす 窪田 空穂

水甕

・みちもせに枯松の葉の散りしきて冬の山路はあかるく寂し 尾上 柴舟

かんらん

・枯草の荒野につづくいただきの鳴虫山の紅葉乏しも 若山 牧水

・あそびの輪ひとりはなれて泣く子あり夕風寒きにあはれにきこゆ 木下 利玄

・たまたまは暇ありけりかやの木の秀のそよぎなど目にとまりつつ 北原 白秋

目につくのは自然との濃密な触れ合いである。当時は一歩外に出れば、周辺には何処にも豊かな自然が息づいていたのだ。歌人の感受性や感覚は、この自然によって磨かれ鍛えられたのだろう。

今日のように高層ビルの林立する、自動車優先の都会の喧噪の中で、ちまちまと気忙しく生きている人間には、こう無防備で大らかな歌は詠めまい。

ついでに尾上柴舟の初句「みちもせに」は「みちが狭いほどに。一杯になるくらいに」(広辞苑)の意、また白秋の結句の「…つつ」は、此の頃からの詠い癖だったのだろう。

さて同人の作品とその合評が同時に掲載されているので、原文のまま引く。

・幼子を爐邊にねむらせうらやすし外にはつの木枯しの音 村野 次郎

○柿谷伸、静寂な郊外の秋も末、冬に近い頃の感じがさながらに流れて爐邊の幼子のねむりに対面しつ、ある作者の心裡がさまで苦心なしに現れてゐる、氏の作としては秀れたものではないが安定を得てゐる。

○石野正太郎、三句やすし、で止め 五句名詞止のためか歌が少し堅くなつたとおもひますが。

○奥野椰子夫、正太郎氏の云はれる様にどうも名詞止めの爲、少し気分がだれて居ると思ふ。

○中河與一、名詞止めはい、と思ひます。寒い野の中の家です。中には爐が燃えてゐる。もう消えかかつてゐるのかもしれない。然しぬくぬくとした室の中の感じが兒の眠つ

たのでよく出てゐる。うらやすしはきいてゐる。

○今井嘉雄、僕も名詞止めは少しも氣にならな。其の他は伸君の云つてゐる言葉に賛成です。

・保安林の中の草道むしあつしとゞろき聞ゆ土用大波 中河 與一

○奥野椰子夫、むしあつしがどうも不愉快な感じを自分に與へる殊にこの歌の缺點は三つの切りより成立してゐて、餘りに氣分のゆとりが伸び過ぎる厭ひがある。

○今井嘉雄、ムツと草いされのする盛夏の眩暈を感じさうなやましい氣分がよく出てゐる 調子の高い歌である

○次郎、保安林は防風林の方がよいと云ふ人があつたけれど 防風林であつて保安林だと云ふから別に故障あるまい 三ヶ所で歌が切れてはゐるが四句の切れは上句の切れとは其趣を異にして居る小休止である しておもむるに大波を出した爲に効を奏して居るのである 下句「とゞろき聞ゆ土用の」の同音で押して行つた所も歌調の上からよい

○正太郎、気分がよく出た好きな歌です